

〈説 明〉

アウグスティヌスの新発見の 書簡・説教・著作について

水 落 健 治

中世の時代を通じて、アウグスティヌスの著作は彼自身の著作目録である『再考録』*Retractationes* および『聖アウグスティヌスの生涯』*Sancti Augustini vita* の執筆者ポシディウスの手になる著作目録 *Indiculum* に従って組織的に整理・筆写されていた。だが彼の書簡と説教については、その目録が *Indiculum* にはあったものの、それらの組織的な整理・筆写は行われず、その結果、他の著作での部分的引用や言及によって間接的にその存在が知られるだけのものも存在していた。

かくして、幾人かの研究者がヨーロッパの図書館・修道院等に存在する 15000 余のアウグスティヌス著作の写本の中から新書簡・新説教を捜し出すべく驚異的努力を続け、1975 年にオーストリアの Johannes Divjak がマルセイユの 15 世紀半ばの写本から 29 の新書簡を、次いで 1990 年に Francois Dolbeau がマインツ市立図書館所蔵の 15 世紀末の写本から 26 の説教（それらはポシディウス *Indiculum* およびカロリング期の著作目録によって名称のみが知られていたものであった）と幾つかの説教抄録を、それぞれ発見した¹⁾。

これらの書簡・説教は、その後著者問題に関する文献学的研究によってその真正性が確定され、現在アウグスティヌスの正規の著作として仏訳と共に刊行されている²⁾。

1) P. Brown, *Augustine the Bishop in the Light of New Documents*, *Patristica*, Supplementary Volume 1, 2001, Sinseisha, Nagoya Japan. pp.131-133.

2) *Oeuvres de Saint Augustin 46B, Lettres 1 * -29 * · Bibliothèque Augustinienne*, 1987,

新たに発見された書簡と説教は、これまで知られていなかったアウグスティヌス周辺の出来事や彼の日常生活の生々しい側面をわれわれに伝えてくれる。新書簡は、419～428年の彼の最晩年の北アフリカでの生活を生き生きと描き出し、新説教は、397年の夏と冬に彼がカルタゴで行った説教と、403～404年の冬から春にかけて彼がカルタゴおよびその近郊で行った説教を収録し、司教に叙階され『告白』を構想していた当時（397年）の彼の姿と、ドナティストや異教徒に対抗するためカトリック教会が行った典礼改革（403～404年）の様子を述べている³⁾。

たとえば、『書簡2*』（428年）では、カルタゴ在住の教養人フィルムスが修辞学に熱中する自らの息子の処遇についてアウグスティヌスに助言を求め、アウグスティヌスはフィルムスに対してキケロとカトーを引用しつつ、修辞学という学問の基本的性格を述べつつ、息子の現状について更に詳しい状況を知らせてほしいと述べている。

だがその一方、それらの書簡・説教には、彼の著作を熱心に読み求めて来たヨーロッパの聖職者や修道士の興味を惹く教義の叙述や神学論争などはあまり含まれておらず、だからこそそれらはあまり筆写されることもなく、次第に忘れ去られて行ったのだと考えられる⁴⁾。

さらに、2013年には、これまで偽作とされて来た『文法学について』*De grammatica*が新たな本文批判の下で刊行されている⁵⁾。

いずれにせよ、これら書簡と説教との発見によってアウグスティヌス研究は、新たな段階に入ったと言ってもよいであろう⁶⁾。

Études Augustiniennes, Paris ; Augustin d'Hippone, *Vingt-Six Sermons au Peuple d'Afrique*, ed. François Dolbeau, 1996, Institut d'Études augustinnes, Paris. さらに、書簡の英訳も刊行されている。 *Saint Augustine Letters Vol.6 (1*-29*)*, transl. R.Eno, Fathers of the Church 81, 1989, Cath. Univ. of America Press, Washington DC.

3) P.Brown, *op.cit.* p.133.

4) P.Brown, *op.cit.*, p.134.

5) *Abbrégé de La Grammaire de Saint Augustin*, ed. par G.Bonnet, Paris, Les Belles Lettres, 2013.

6) 筆者が参加した2019年8月の国際教父学会（Oxford）では、これら新書簡・新説教に関わる研究発表も幾つかあった。